

胃癌診断における造影マルチスライスCTの有用性の検討

(九州大学病院で2006年から2009年までに胃癌を切除された方の中で、術前に造影ダイナミックCTが施行された方を対象)

【はじめに】

肝臓など腹部実質臓器の腫瘍性病変における、造影CTを用いた血流情報の臨床的有用性はほぼ確立されていますが、胃や腸など管腔臓器については十分検討されていません。一般的に癌の多くは血のめぐりが豊富でこのため転移もしやすいと考えられています。

現在、消化管診断の分野では、腫瘍が悪性かどうか、早期癌か進行癌かなどの区別は、腫瘍の形態から推測する診断手法が確立していますが、正しく診断され適切な治療が行われても再発することが問題となっています。そこで、従来の形態診断に加え、血流情報も加味した診断手法が可能となれば、胃癌の悪性度の評価や再発の予測に役立つ可能性があり、臨床的有用性が増すと考えられます。

【研究内容】

造影マルチスライスCTによる容積データを用い、胃壁の血管構築や腫瘍の増強効果を表示可能な新しい3次元画像を作成し、至適表示条件の検討を行います。さらに、その結果をもとに、胃癌の悪性度の評価、術前化学療法の効果判定、胃癌の術前内視鏡治療術前の血管分布についての臨床応用の可能性について検討・考察します。

【患者さんの個人情報の管理について】

本研究の実施過程およびその結果の公表(学会や論文等)の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

もし、対象者となることを希望されない方は、下記連絡先までご連絡下さい。

【研究期間】

研究を行う期間は承認日から2012年3月31日まで。

【医学上の貢献】

造影マルチスライスCTを用いることで胃癌の増強効果を非侵襲的かつ正確に評価することができます。CTによる情報で胃癌の病理学的悪性度を類推することができる可能性があり、従来通りの検査の範囲内で、付加情報を獲得できます。治療法や経過観察の間隔の決定に寄与する可能性があります。

【研究機関・組織】

九州大学大学院医学研究院 臨床放射線科 教授 本田浩(責任者)

九州大学病院 放射線部 准教授 畠中正光、助教講師 西江昭弘

九州大学病院 放射線科 助教 川波哲、医員 古森正宏、鶴丸大介

連絡先: 〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel 092-642-5695 担当者 畠中正光